

# 将来人口推計とは — その役割と仕組み —

令和4年6月23日

国立社会保障・人口問題研究所

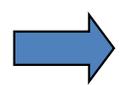
<http://www.ipss.go.jp/>

# 報告のアウトライン

- 将来人口推計とは
- 前回推計の評価
  - 推計結果の評価
    - 総人口
  - 変動要因の評価
    - 出生
    - 死亡
    - 国際人口移動
- 中長期仮定設定の見直しのポイント

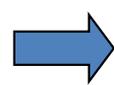
## 将来人口推計の役割と要件

◎ 将来人口推計は、施策、開発計画の立案、経済見通し等に必要な人口の規模および構造に関する基礎資料として、広範な分野で利用されている。



客観性

中立性



正確なデータ

+

客観的手法

ただし、将来は不確定、不確実である。

◎ 科学的に将来の社会を定量的に正確に描く方法は存在しない。

測定と手法の不完全性

将来の出来事すべてを把握することの不可能性

◎ 現状で求めうる最良のデータと最良の手法を組み合わせ、客観的な推計を行う。

専門性

説明責任

# 科学における「予測」とその目的

## 1. 未来は統計的推定の対象か？

※ 統計的推定=実測データに基づいて母集団の特性(母数)を統計手法によって割り出すこと。

- ・ 現在において未来は「わからない」のではなく「存在しない」と考える立場では、未来は統計的な推定の対象とはなり得ない (母数が存在しない)

## 2. 科学的予測とは？ … 既存の母数の「推定」ではなく、シミュレーション

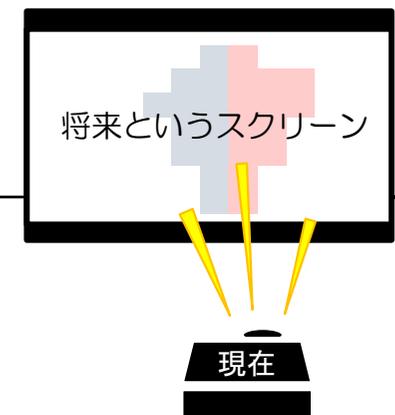
- ・ 初期値(条件) → 因果モデル → (計算) → シミュレーション結果  
科学的予測 ←

## 3. 二種類の科学的予測 … 天気予報と将来推計人口はどこがちがう？

- ・ 予測対象が **操作不能**  
→ 将来の状況(雨天)へ事前に対処(傘の準備)することが予測の目的
- ・ 予測対象が **操作可能**  
→ 将来の状況への対処とともに 働きかけも予測の目的のひとつ

## 4. 社会科学における予測の目的

- ・ 社会科学の「予測」の主な目的は、将来実現する状況を言い当てることよりも、現在の状況と趨勢が続いた場合に帰結する状況を示して(投影)、我々が 現在 行うべき行動 についての指針を得ることにある。



投影は社会科学の顕微鏡

## 人口投影 - Population Projection - による将来人口推計

- 「**人口投影** (population projection)」は、出生・死亡・人口移動などについて、一定の仮定を設定し、将来の人口がどのようなようになるかを計算したもの。
- 国などの公的機関が行う将来人口推計では、**客観性・中立性**を確保するため、出生・死亡・人口移動などの仮定値は、過去から現在に至る傾向・趨勢を将来に投影し設定する。

すなわち、将来人口推計は、

- 少子化等の人口動向について、観測された人口学的データの**過去から現在に至る傾向・趨勢を将来に投影**し、その帰結としての人口の姿を**科学的に描いたもの**。
- **未来を当てる予言・予測を目的としたものではない**。

# 将来人口推計（投影）の方法

## 関数あてはめ法

- ・過去の人口趨勢に数学的関数をあてはめて将来人口を投影する方法

（必要となるデータ：総人口）

例 指数関数やロジスティック曲線をあてはめる投影法 等

## コーホート変化率法

- ・同一コーホートの2時点間における年齢別人口の変化率に基づいて将来人口を投影する方法

（コーホート間での変化率に着目する点が、単に総人口の変化率に着目する方法と本質的に異なる）

（必要となるデータ：2時点における国勢調査データ）

例 人口動態統計が安定的でない小地域の人口推計 等

## コーホート要因法

- ・出生、死亡、移動等の人口の変動要因の動向を仮定してコーホート毎に将来人口を推計する方法

※ わが国の全国推計のように詳細な人口統計が得られる場合には、コーホート要因法が最も信頼できる方法と評価されている。

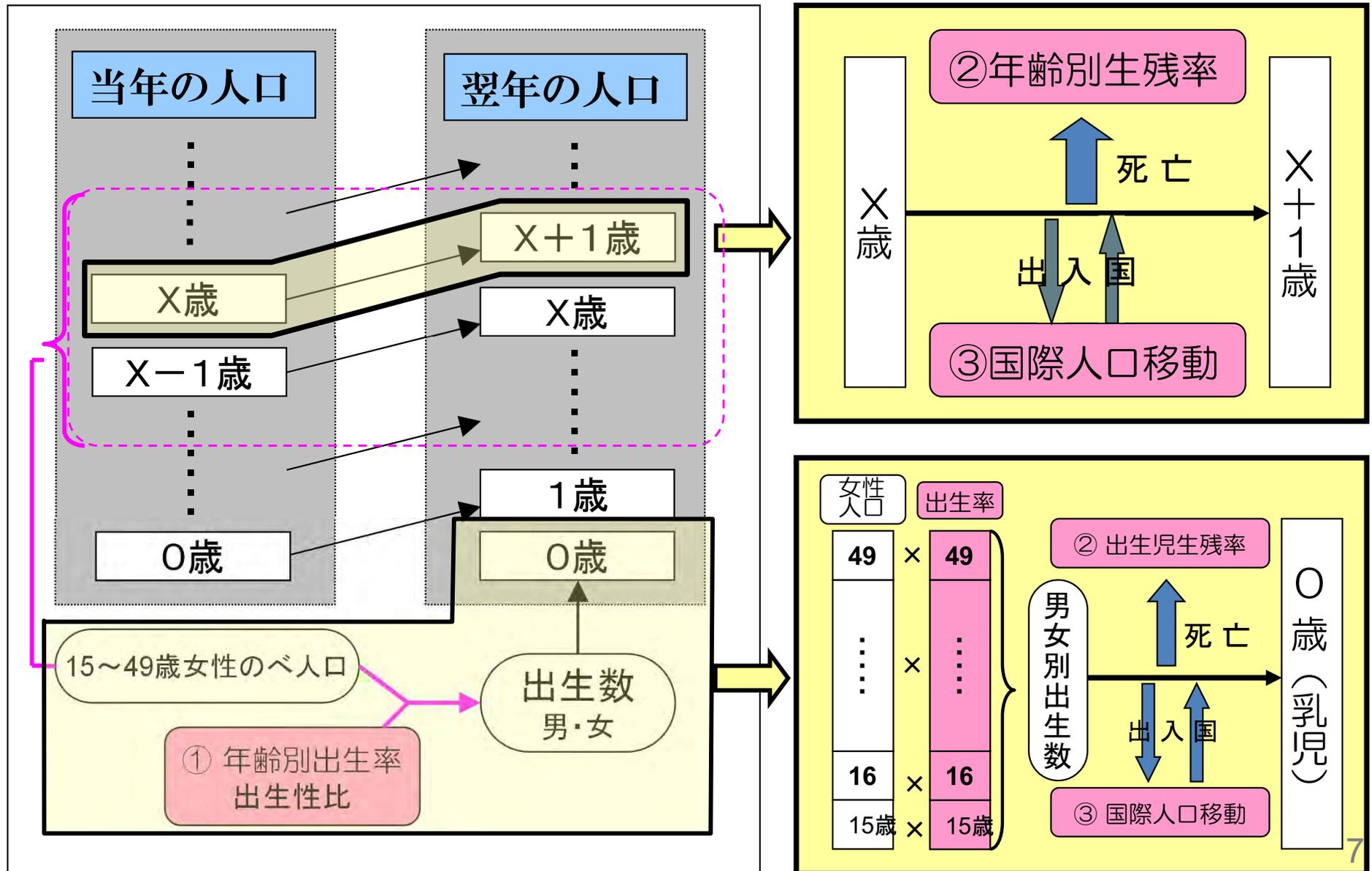
（必要となるデータ：基準人口、出生・死亡の人口動態統計及び人口移動統計）

例 国などの公的機関が行う将来人口推計の標準的な方法（各国の推計はほぼ全てこの方法による）

**コーホート**とは人口観察の単位集団で、通常は「**出生コーホート**」（出生年が同じ人口集団）を指す。

# 将来人口推計の計算手順と仮定値

コーホート要因法による人口推計の計算と仮定値の関係を示すと以下のようなになる。



# 将来人口推計の仮定設定の考え方

## 人口推計に必要な仮定値

### ① 将来の出生動向

女性の年齢別出生率、  
出生性比

### ② 将来の死亡動向

男女・年齢別生存率

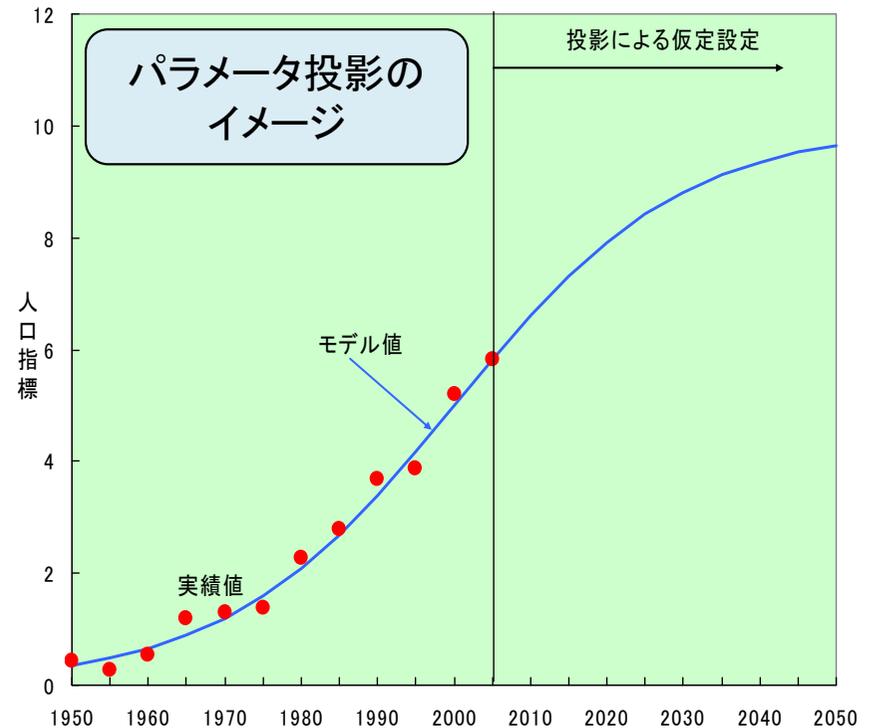
### ③ 将来の国際人口移動の動向

男女・年齢別国際人口移動

将来の行動や状況がわからない中、  
これらの仮定値はどのように設定  
されるのか？

## 人口変動要因の仮定設定

人口投影では、人口変動要因についても、  
基準時点で得られる人口学的データの過去  
から現在にいたる傾向・趨勢を将来に投影す  
ることにより仮定設定を行う。

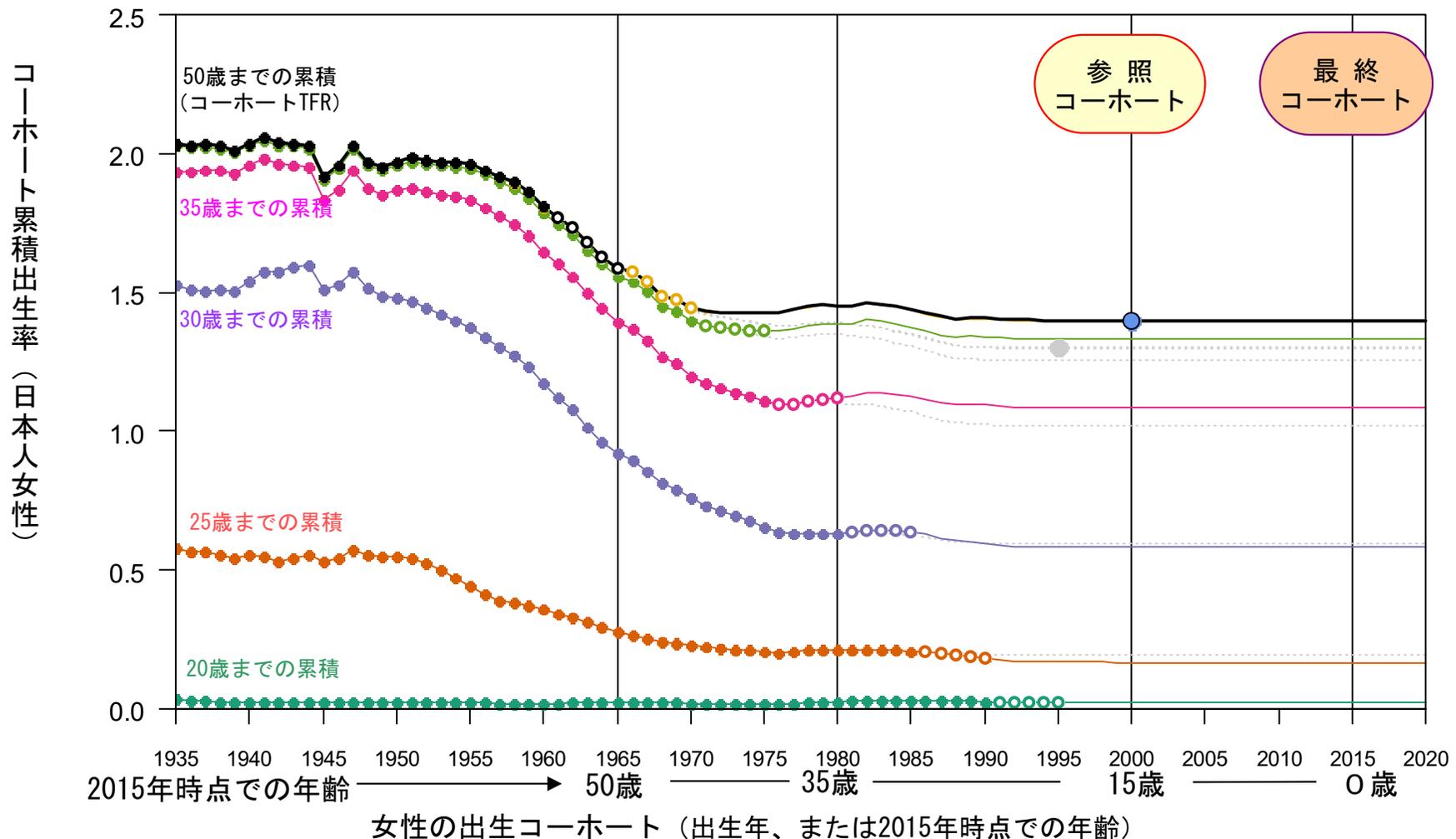


# コーホート出生率の投影

## 出生仮定の設定

出生仮定については、コーホート年齢別出生率が安定的なパターンを示すことから、コーホート別の出生動向に着目して投影することにより仮定設定を行っている。

## 女性の出生コーホート別累積出生率

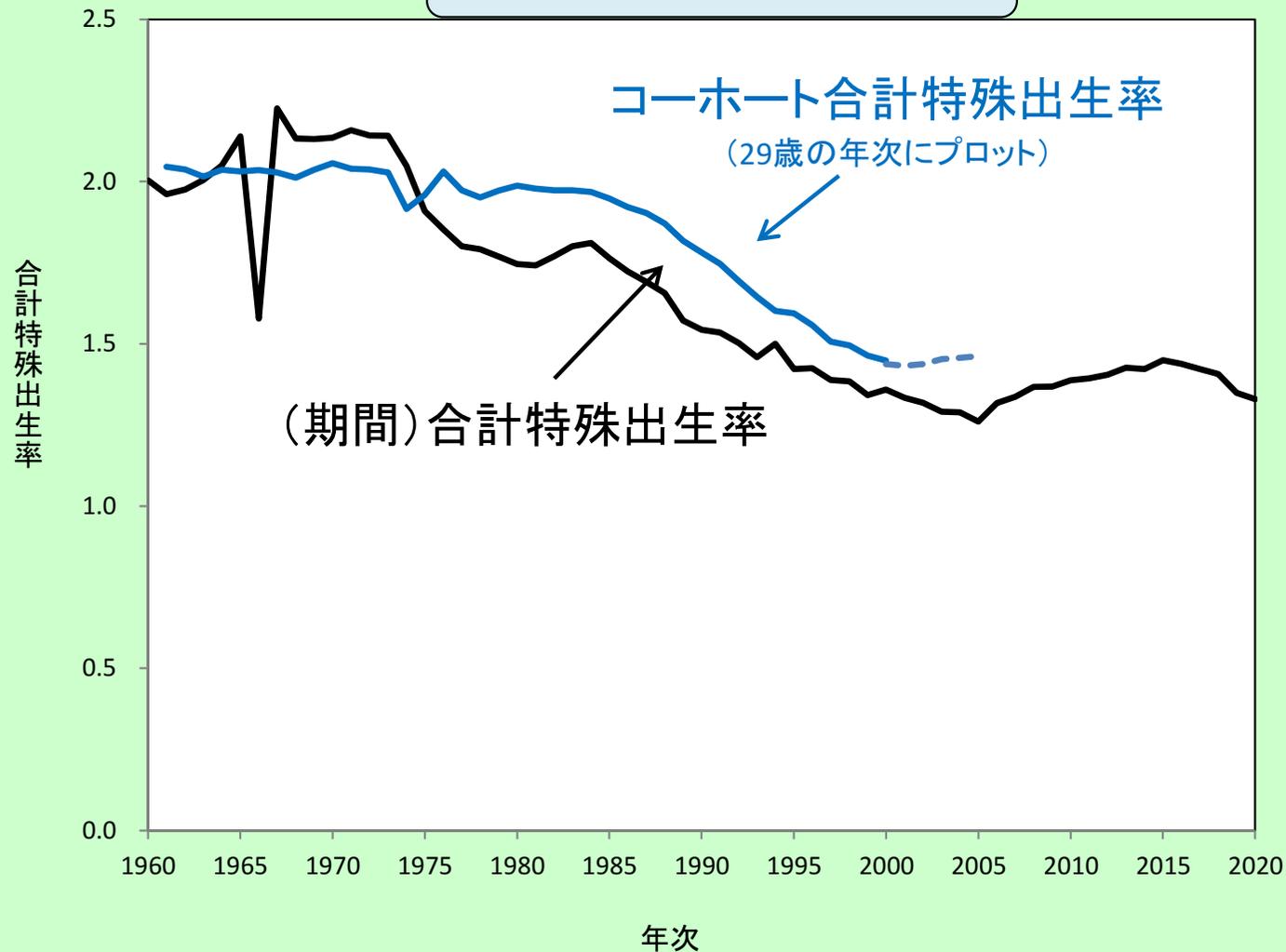


# 期間出生率 対 コーホート出生率

## なぜ、コーホート出生率を推計の対象とするのか？

期間出生率には、コーホート出生率には見られない大きな変動が見られる。ひのえうまの年(1966年)をはじめ、期間出生率はタイミング効果の影響を大きく受ける。

日本 (1960~2020年)

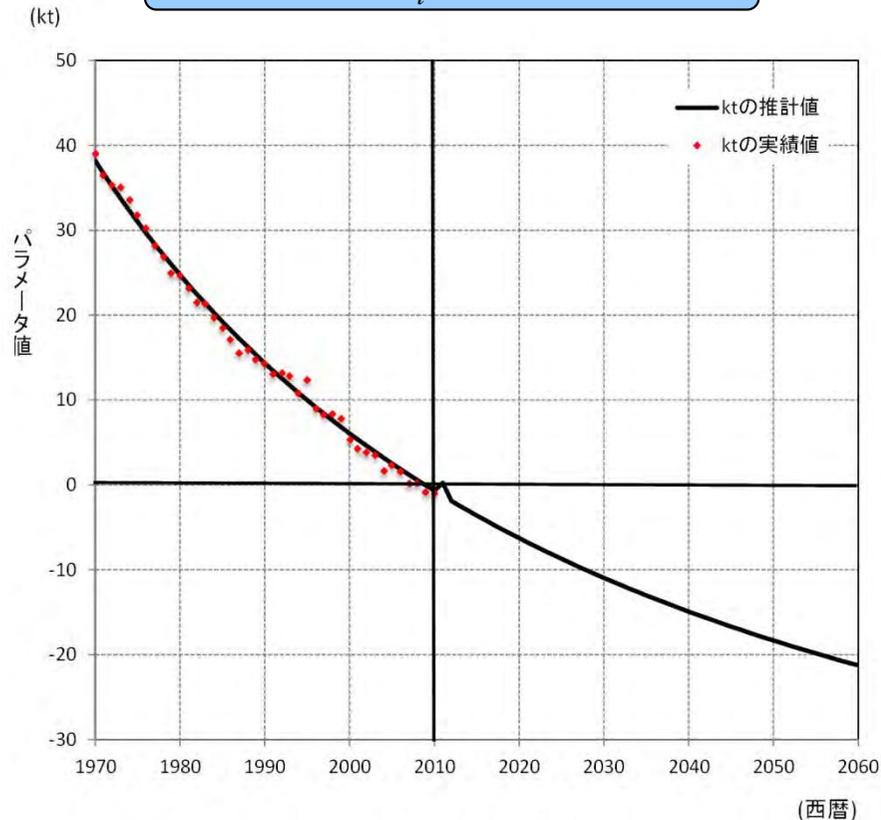


# 人口変動要因の投影の実際(死亡率の例)

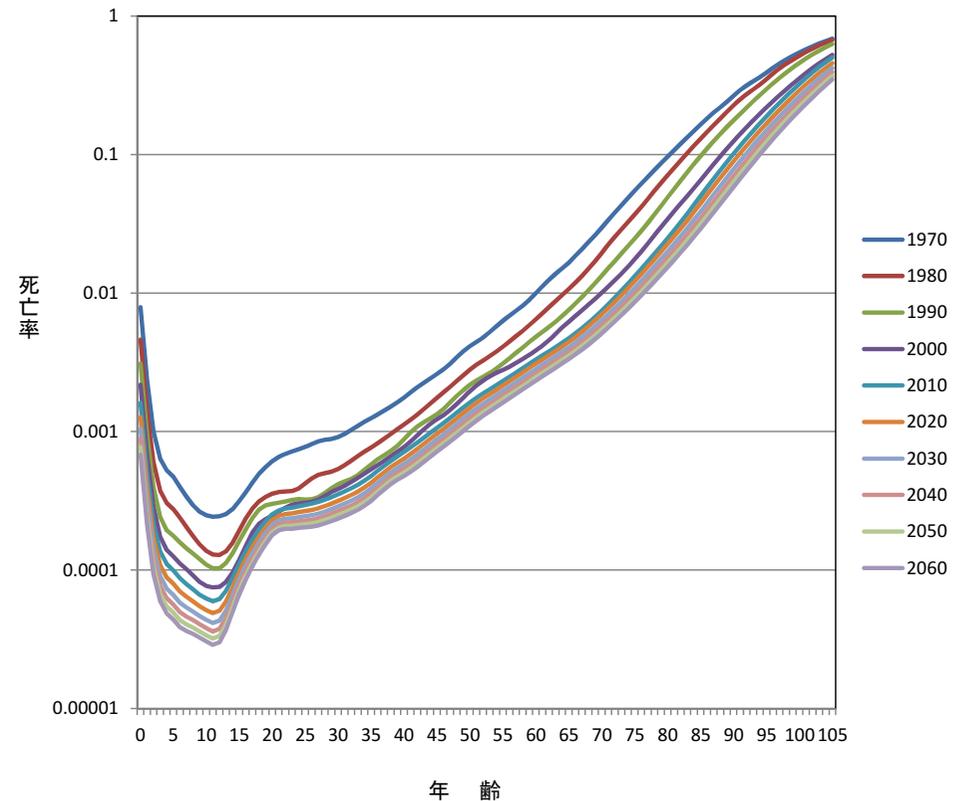
## 死亡仮定の設定

修正リー・カーターモデル  $\ln(m_{x,t}) = a_x + b_x \cdot k_t + \varepsilon_{x,t}$  ( $m_{x,t}$ : 死亡率)を過去のデータに適用し、死亡の水準を表すパラメータ  $k_t$ の時系列推移を将来に投影することにより、男女別将来生命表を作成している。

## パラメータ $k_t$ の投影(女性)



## 死亡率投影結果(女性)

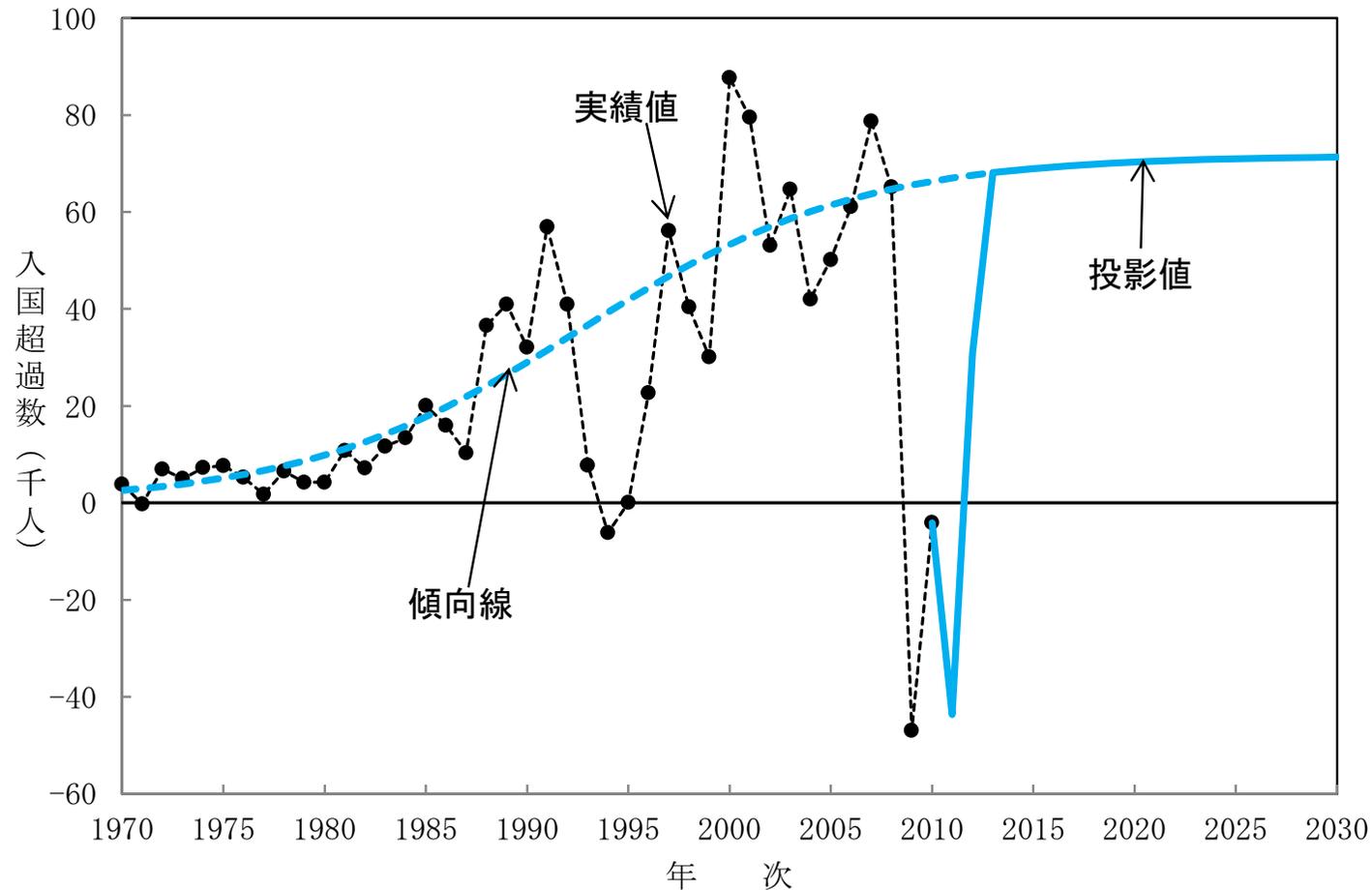


# 人口変動要因の投影の実際(国際人口移動の例)

## 外国人の国際人口移動の設定

外国人の入国超過数については、近年の実績を数学的曲線により補外して投影している。

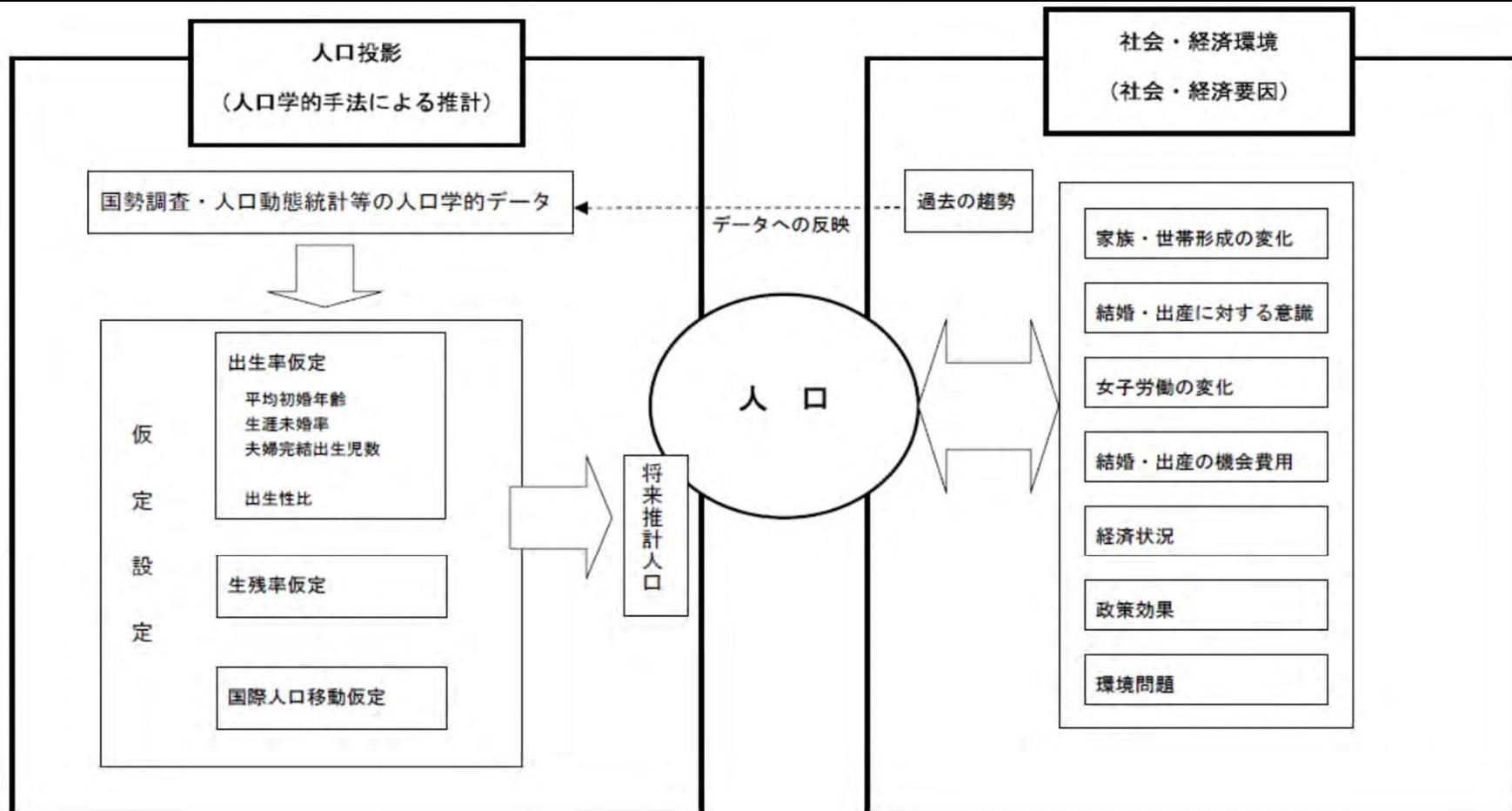
## 外国人入国超過数



# 将来人口推計と社会経済要因や政策効果との関係

◎ 社会経済環境や政策効果の過去の趨勢(右)は、観測された人口学的データ(左)に反映される。将来人口推計は、そうした人口学的データや指標を投影することによって行われるため、社会経済環境や政策効果の過去から基準時点に至る趨勢を織り込んだものとなっている。

◎ 一方、**基準時点以後**に起きうる社会経済の構造的変化や新たな政策の効果などは**織り込まれない**ことになるが、これらを**科学的・定量的に正確に描く方法は存在しない**。



# 将来人口推計と社会経済要因との関係（出生仮定の例）

◎ 出生仮定は、女性の出生コーホート別の出生パターンによって行われる。

## コーホート合計特殊出生率の分解

コーホート合計特殊出生率は、以下のような人口指標の要素によって構成されている。

コーホート

合計特殊出生率 = (1 - 50歳時未婚率) × 夫婦完結出生子ども数 × 離死別再婚効果係数

結婚する女性の割合

夫婦の子ども数

離婚・死別の効果

平均初婚年齢

## 人口統計指標をとりまく諸要因

(人口統計指標)

(社会経済要因の例)

平均初婚年齢

: 進学率、就業環境、.....

50歳時未婚率

: 結婚観・家族観等の意識、就業環境、.....

夫婦完結出生子ども数

: 子育て環境、就業環境、機会費用、.....

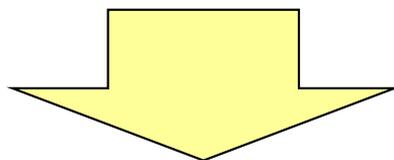
離死別再婚効果係数

: 結婚観・家族観等の意識、.....

## 社会経済状況の見通しや政策効果を将来人口推計に反映させることについて

### 社会経済状況の見通しや政策効果の反映について

- ◎ 出生、死亡、移動などの人口変動要因と関連する社会経済要因は多岐にわたり、個々の関係を定量的に特定することが難しいだけでなく、それらの相互作用をすべて勘案することは、現状において科学的に不可能。
- ◎ また将来人口推計は、数十年に及ぶ長期の推計であるが、将来の社会経済状況をそのような長期間にわたって見通すこと自体が困難であり、投影に基づく人口推計よりも不確実性が大きい。
- ◎ 政策効果についても、人口統計指標との関係を定量的に高い精度で特定し、推計に反映させりことは困難。



- ◎ 諸外国においても、公的機関で行われる将来人口推計が、社会経済状況の見通しや政策効果を取り入れている例はなく、人口統計データに基づき、「人口投影」の考え方にしがたって行うことが標準的である。

## 将来人口推計とは —その役割と仕組み— (まとめ)

### 将来人口推計(投影)の目的・役割と方法

- ・ 将来人口推計は、広範な分野で使われており、客観性・中立性が求められる。
- ・ 将来人口推計は、人口変動要因の動向に一定の仮定を設定して人口を計算する「人口投影」の考え方に基づいて行われる。
- ・ 手法としては「コーホート要因法」が国際的にも標準的な方法である。

### コーホート要因法

- ・ コーホート要因法は、出生・死亡・移動等の人口変動要因に基づいてコーホート毎に将来人口を推計する方法である。①将来の出生動向、②将来の死亡動向、③将来の国際人口移動の動向を仮定して用いる。
- ・ 国など公的機関が行う将来人口推計では、これらの人口変動要因についても人口統計データの傾向を将来に投影することにより仮定設定を行っている。

### 将来人口推計と社会経済要因

- ・ 将来人口推計において、社会経済環境の趨勢は、人口統計データを介して仮定設定に反映されるが、直接的に推計に用いるものではない。
- ・ 将来の社会経済状況の見通しや政策効果を将来人口推計に科学的に反映させることはできない。諸外国における将来人口推計においても、これが行われている例はない。

# 参考資料：主要先進諸国と国連の将来人口推計枠組み

推計機関	推計周期	推計期間	基準人口	推計手法	仮定の種類と設定方法(2065年時点の値、異なる場合セル内に年次記載)			推計 ハリエーション数
					出生率(TFR)	死亡率(平均寿命(年))	国際人口移動(純移動数)	
日本 (国立社会保障・人口問題研究所)	5年	2015-2065 (参考推計～2115)	2015年 10月1日人口	コーホート 要因法	3仮定 中位1.44 高位1.65 低位1.25	3仮定 中位: 男84.95 女91.35 高位: 男83.83 女90.21 低位: 男85.05 女92.48	1仮定 40345	9
韓国 (韓国統計庁)	5年	2017-2067 (参考推計～2117)	2017年 7月1日人口	コーホート 要因法	3仮定 中位1.27 高位1.45 低位1.10 作業シナリオとして 2018年値一定、OECD平均値	3仮定 中位: 男88.3 女91.5 高位: 男87.2 女90.2 低位: 男89.1 女92.6	3仮定 中位35000 高位95000 低位-22000 モデルシナリオとして、ゼロ仮定あり	本推計27 + モデル推計3
アメリカ (アメリカセンサス局)	10年ごと(中間年に不定期に数回)	2017-2060	2016年 7月1日人口	コーホート 要因法	1仮定 合計 1.84(2060年) 外国生まれ ヒスパニック:2.35 非ヒスパニックAPI <sup>1)</sup> :1.82 非ヒスパニック白人・黒人・AIAN <sup>2)</sup> : 2.14 アメリカ生まれ API:1.46 白人:1.79 黒人:1.84	1仮定 合計 男83.9 女87.3(2060年) 外国生まれ 非ヒスパニック白人・API: 男85.4 女 88.5 非ヒスパニック黒人・AIAN: 男85.1 女 88.4 ヒスパニック: 男85.2 女88.5 アメリカ生まれ 非ヒスパニック白人・API: 男83.9 女 87.2 非ヒスパニック黒人・AIAN: 男82.4 女 86.2 ヒスパニック: 男84.3 女87.8	4仮定 中位 1,118,000(2060年) 入移民高位 1,763,000 入移民低位 687,000 入移民ゼロ -174,000	4
オーストラリア (オーストラリア統計局)	5年	2017-2066	2017年 6月30日人口	コーホート 要因法	3仮定 中位1.80 高位1.95 低位1.65	2仮定 死亡率改善漸減: 男83.0 女86.0 死亡率改善一定: 男87.7 女89.2	3仮定 中位225,000 高位275,000 低位175,000	72
ニュージーランド (ニュージーランド統計局)	3年	2020-2073	2020年 6月30日人口	コーホート 要因法	1仮定+1 確率推計中位数:1.65 95th %ile 2.25 5th %ile 1.06 シナリオ推計仮定値: 超高位仮定2.3	1仮定+1 確率推計中位数: 男86.6 女89.5 95th %ile 男84.3 女87.5 5th %ile 男88.7 女91.2 シナリオ推計仮定値: 超低位仮定: 男女とも96.0	1仮定+3 確率推計中位数: 25,000 シナリオ推計仮定値: 超高位50,000 ゼロ(封鎖人口) サイクル: -6,000~60,000の範囲で 10年毎に変動(平均25,000)	確率推計10 (2.5th-97.5th %ile)・ モデル推計5
フランス (国立統計経済研究所)	5年	2013-2070	2013年 1月1日人口	コーホート 要因法	3仮定+1 中位1.95 高位2.10 低位1.80 シナリオ推計仮定値: 2020年以降1.6一定	3仮定+1 中位: 男89.3 女92.4 高位: 男86.5 女89.6 低位: 男92.3 女95.3 シナリオ推計仮定値: 2014年値一定	3仮定+1 中位70,000 高位120,000 低位20,000 ゼロ(封鎖人口)	本推計27 + モデル推計3

出所: 石井太・守泉理恵・岩澤美帆・中村真理子(2021)「国際的視点から見た公的将来人口推計の科学的基礎と推計手法」『人口問題研究』, 第77巻第4号, pp.335-357.

# 参考資料：主要先進諸国と国連の将来人口推計枠組み(つづき)

推計機関	推計周期	推計期間	基準人口	推計手法	仮定の種類と設定方法(2065年時点の値、異なる場合セル内に年次記載)			推計 バリエーション数
					出生率(TFR)	死亡率(平均寿命(年))	国際人口移動(純移動数)	
イギリス (イギリス統計局)	2年	2018-2043 (参考推計～ 2118)	2018年 6月30日人口	コーホート 要因法	3仮定(2043年) 中位1.78 高位1.88 低位1.58	3仮定(2043年) 中位:男82.6 女85.5 高位:男81.2 女84.4 低位:男83.5 女86.2	3仮定(2043年) 中位190,000 高位290,000 低位90,000 (2025年以降一定)	18
ドイツ (ドイツ統計局)	3年	2018-2060	2017年 12月31日人口	コーホート 要因法	3仮定+2(2060年) 中位1.55 高位1.73 低位1.43 シナリオ推計仮定値: 2.1回復、1.57一定	3仮定(2060年)+1 中位:男84.4 女88.1 高位:男82.5 女86.4 低位:男86.2 女89.6 シナリオ推計仮定値: 一定仮定 男78.4 女83.2	3仮定(2060年)+2 中位226,000 高位300,000 低位110,500 シナリオ推計仮定値: ゼロ(封鎖人口)、386,000一定	本推計21 + モデル推計9
スペイン (スペイン統計局)	2年	2020-2070	2020年 1月1日人口	コーホート 要因法	3仮定(2069年) 中位1.43 高位1.78 低位1.08	1仮定(2069年) 男85.8 女90.0	3仮定 中位299,000 高位394,700 低位203,300	8
ノルウェー (ノルウェー統計局)	2年	2020-2100	2020年 1月1日人口	コーホート 要因法	3仮定 中位1.74 高位1.94 低位1.33	3仮定+1 中位:男89.3 女92.4 高位:男86.5 女89.6 低位:男92.3 女95.3 シナリオ推計仮定値: 2020年値一定	3仮定+1 中位10,483 高位25,864 低位5,750 シナリオ推計仮定値: 国際人口移動ゼロ、入移民・出移民 同数による純移動ゼロ、一定	本推計11 + モデル推計4
スウェーデン (スウェーデン統計局)	1年 (3年毎 詳細分析)	2021-2070 詳細分析回 (参考推計～ 2120)	2020年 12月31日人口	コーホート 要因法	3仮定 中位(合計)1.81 スウェーデン生れ 1.8 スウェーデン以外北欧・EU諸国生れ 1.63 アフリカ生れ2.0 アジア生れ1.90 北欧・EU以外ヨーロッパ諸国・南北ア メリカ・オセアニア生れ1.85  高位1.92 低位1.64	3仮定 中位(合計)男87.2 女89.3 スウェーデン生れ 男87.1 女89.2 スウェーデン以外北欧・EU諸国生れ 男86.4 女88.9 アフリカ生れ 男88.1 女90.1 アジア生れ 男88.1 女90.1 北欧・EU以外ヨーロッパ諸国・南北ア メリカ カ・オセアニア生れ 男87.4 女89.5 高位:男81.8 女85.0 低位:男91.8 女93.8	3仮定 中位(合計)32,436 スウェーデン生れ -6,196 スウェーデン以外北欧・EU諸国生れ 9574 アフリカ生れ4490 アジア生れ16,585 北欧・EU以外ヨーロッパ諸国・南北ア メリカ カ・オセアニア生れ 7,983  高位35,314 低位21,378	7
国連 (国連人口部)	2年	2020-2100	2020年 7月1日人口	コーホート 要因法	6仮定 中位[確率推計中位数](1.62) 高位(2.12)、低位(1.12)、 一定推計、置換水準、モメンタム (括弧内は日本の2065-70年仮定 値)	2仮定 中位[確率推計中位数] (男87.14 女93.31)、 一定推計 (括弧内は日本の2065-70年仮定 値)	2仮定 中位(244,000)、 ゼロ(封鎖人口) (括弧内は日本の2065-70年仮定 値)	9 (確率推計 結果以外の シナリオ推計数)

注：1) AIAN=American Indian and Alaska Native、2) API=Asian and Pacific Islander

出所：石井太・守泉理恵・岩澤美帆・中村真理子(2021)「国際的視点から見た公的将来人口推計の科学的基礎と推計手法」『人口問題研究』, 第77巻第4号, pp.335-357.

# 推計結果の評価

# 総務省による実績人口について

- 国勢調査

5年ごとに実施。平成27年10月1日人口および令和2年10月1日人口。

- 人口推計

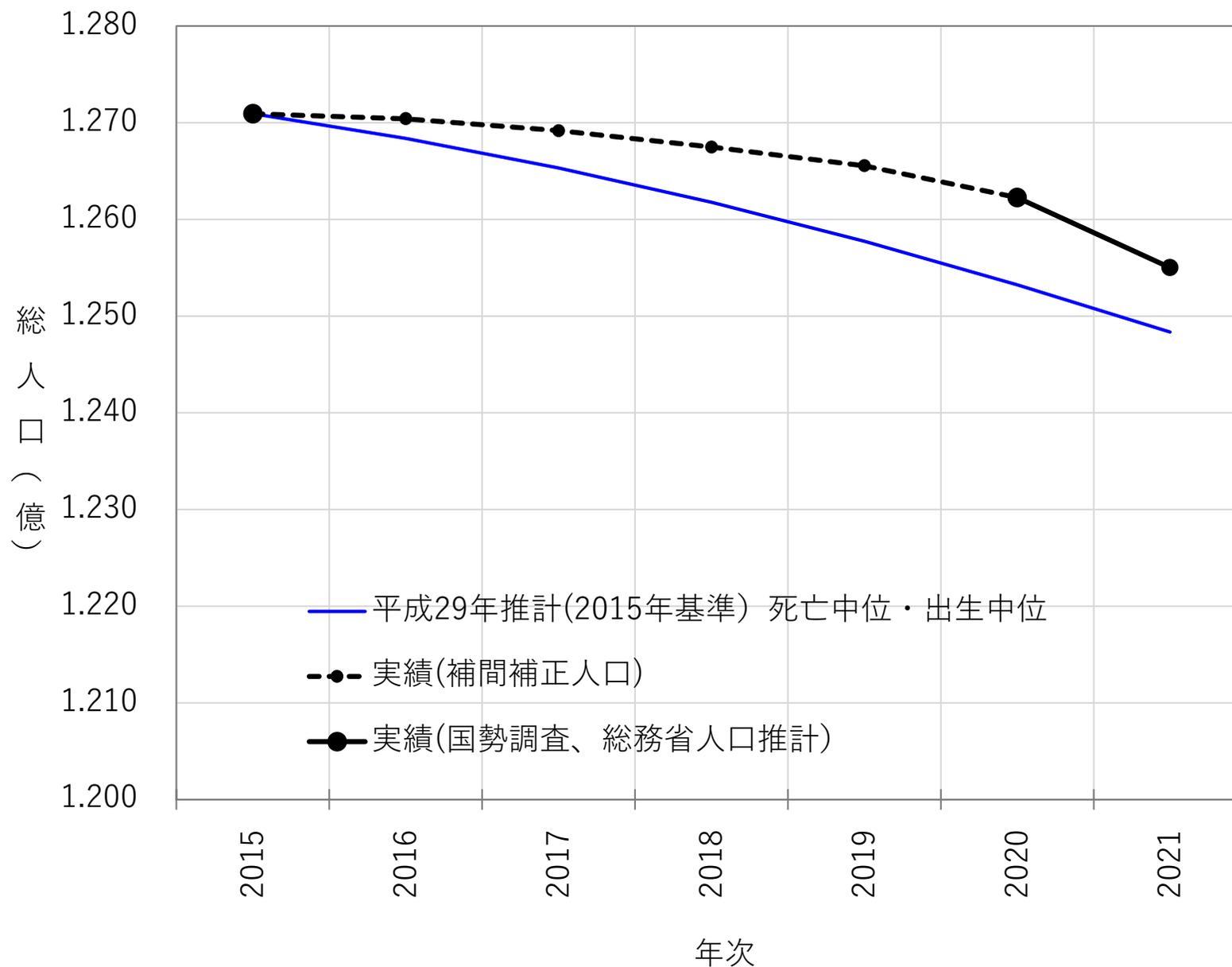
国勢調査による人口を基礎(基準人口)として、その後の人口動向を、他の人口関連資料から得て、毎月1日現在の人口を算出したもののうち、各年10月1日現在の人口。

- 補間補正人口

令和2年10月1日現在の人口推計と令和2年国勢調査人口とは必ずしも一致しないため、平成27年国勢調査と令和2年国勢調査の人口を基に、その間の各月の人口について補間補正を行ったもの(差分を各年に振り分け)。

# 総人口：

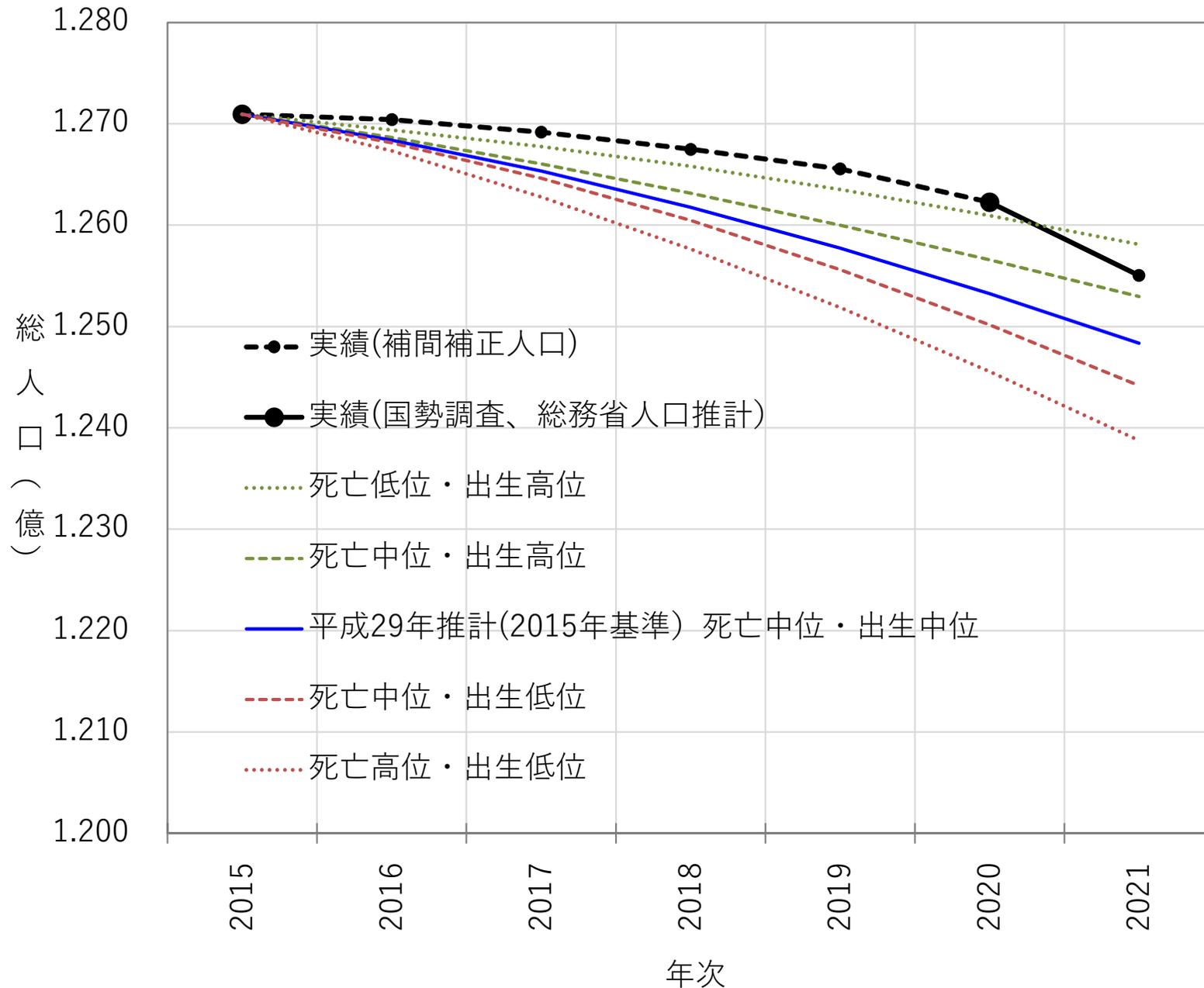
平成29年推計(出生中位・死亡中位)と  
実績(国勢調査結果(平成27年、令和2年)、補間補正人口、人口推計)



# 総人口：

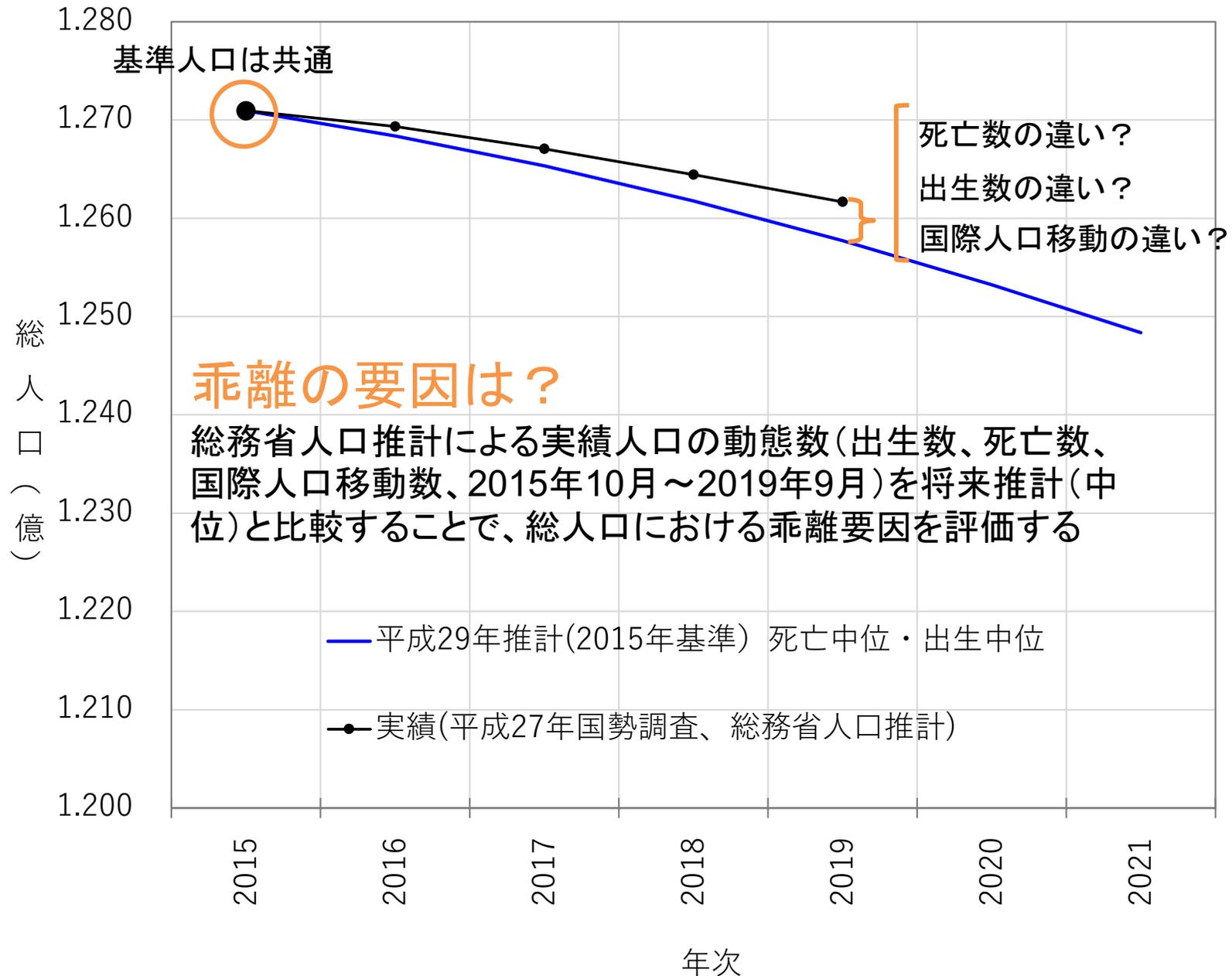
平成29年推計(各仮定水準)と

実績(国勢調査結果(平成27年、令和2年)、補間補正人口、総務省人口推計)



# 総人口：

平成29年推計(各仮定水準)と実績(総務省人口推計(補間補正前))



# 実績人口と推計人口の比較 : 令和元(2019)年

令和元(2019)年の(年齢別)人口について、実績値(総務省推計)と直近の将来推計結果(平成29年推計・出生中位・死亡中位)を比較した。総人口は、推計値が39.4万人(0.31%)過小であった。これは主に国際人口移動に起因する部分44.4万人(0.35%)によるものであり、出生率の違いに起因する部分3.8万人(0.03%)、生残率の違いに起因する部分は1.1万人(0.01%)それぞれ過大推計となっていた(いずれも2015年10月以降の動態)。

(単位:1,000人)

	年 齢	令和元(2019)年人口		差 (推計-実績)	差の内訳		
		実績値 (総務省推計)	将来推計値 (中位推計)		出生率 による	生残率 による	国際人口 移動による
実 数 の 比 較 (千 人)	総 数	126,167	125,773	-394	38	11	-444
	0~14歳	15,210	15,235	25	38	1	-15
	15~64歳	75,072	74,622	-449	...	-24	-426
	65~74歳	17,395	17,399	4	...	7	-2
	75歳以上	18,490	18,516	26	...	27	-1

(%)

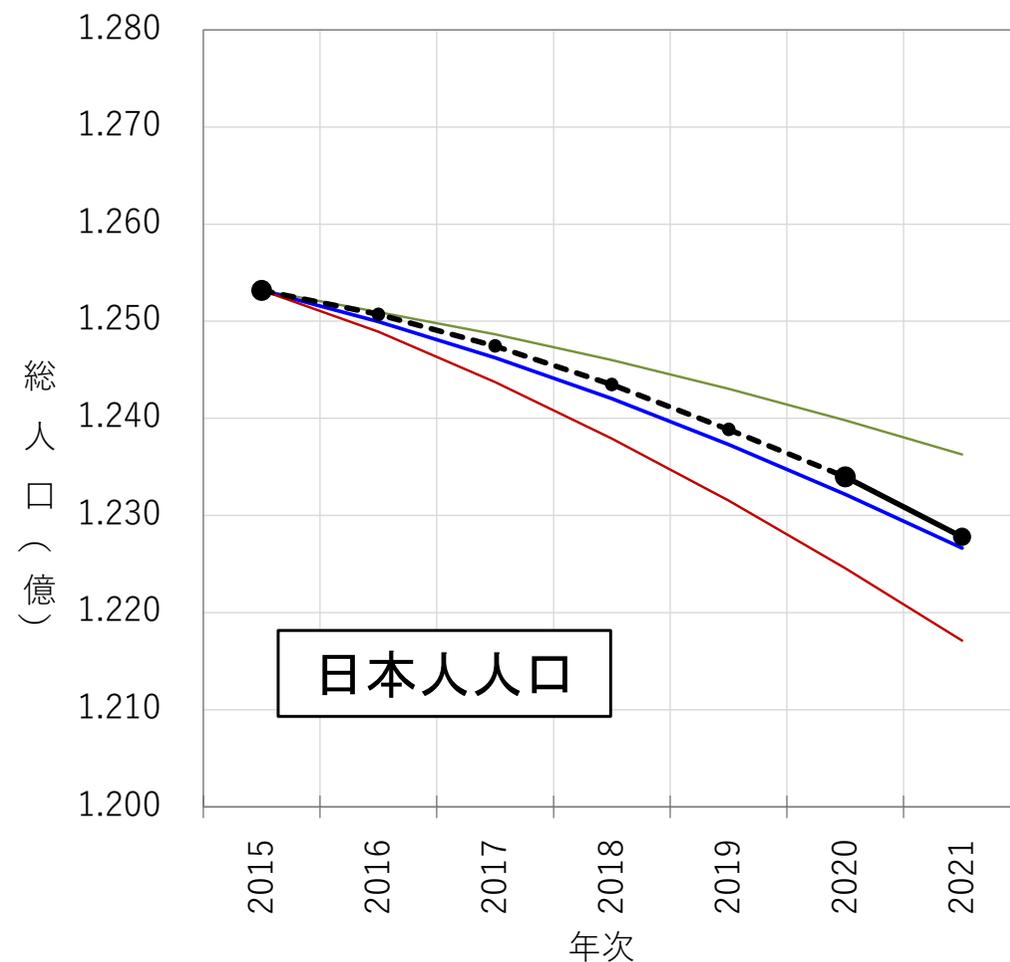
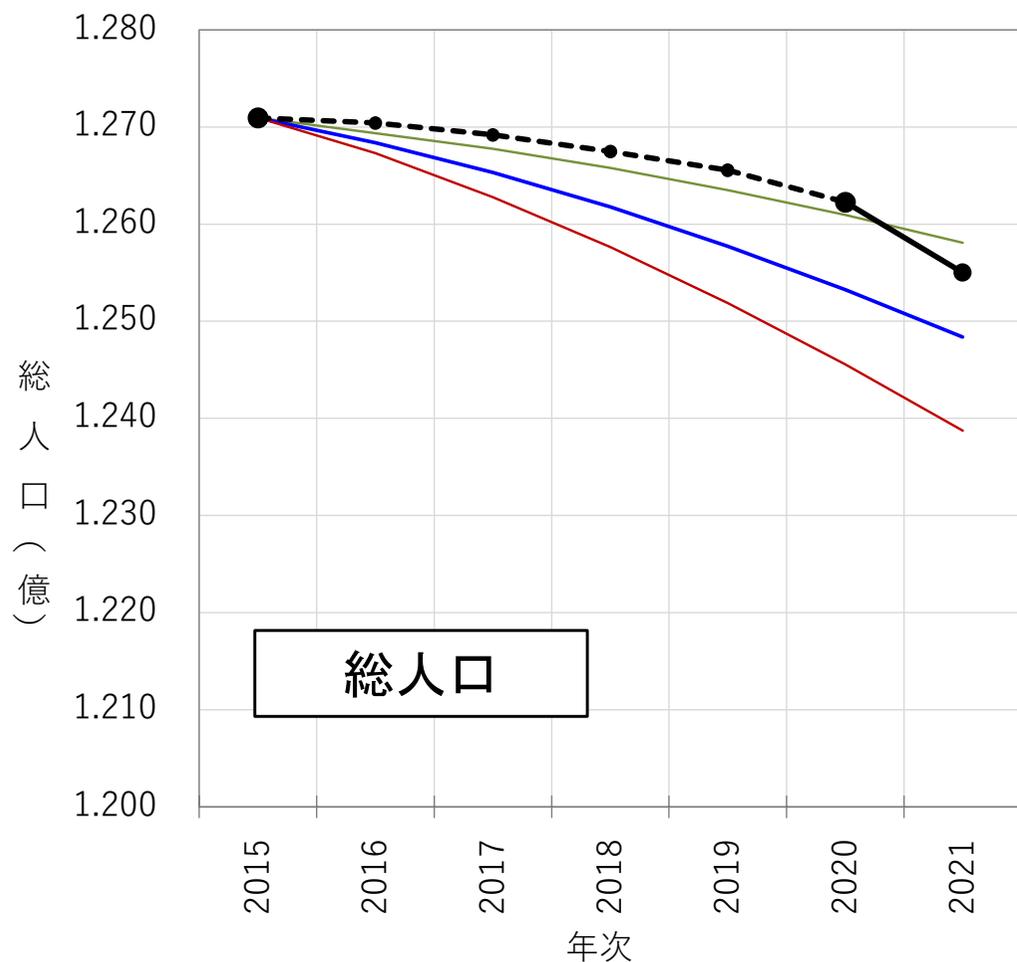
相 対 比 較 (実 績 100)	総 数	100.0	99.7	-0.31	0.03	0.01	-0.35
	0~14歳	100.0	100.2	0.16	0.25	0.01	-0.10
	15~64歳	100.0	99.4	-0.60	...	-0.03	-0.57
	65~74歳	100.0	100.0	0.03	...	0.04	-0.01
	75歳以上	100.0	100.1	0.14	...	0.15	-0.00

※ 差について、プラス値は推計が過大、マイナス値は推計が過小であったことを示す。

## 中位推計の評価

- 2019年時点の評価によれば、中位推計については、出生率と死亡率(生残率)による影響は僅少。
- この間に進められた外国人労働者政策や経済活動の変化による国際人口移動の影響が相対的に大きい。
- 出生率により仮定が過大であった割合は0.03%、死亡率により過大であった割合は0.01%、国際人口移動仮定により過小であった割合は0.35%であり、全体としての過小幅は0.31%程度に収まっている(2019年の人口は中位推計よりも、0.31%人口が多い)。
- 年齢構造について65歳以上人口割合をみると、実績の28.4%に対し、推計は28.6%とわずかに過大であった。

# 参考：総人口と日本人人口の推移



- 死亡低位・出生高位
- 平成29年推計(2015年基準) 死亡中位・出生中位
- 死亡高位・出生低位
- 実績(補間補正人口)
- 実績(国勢調査、総務省人口推計)

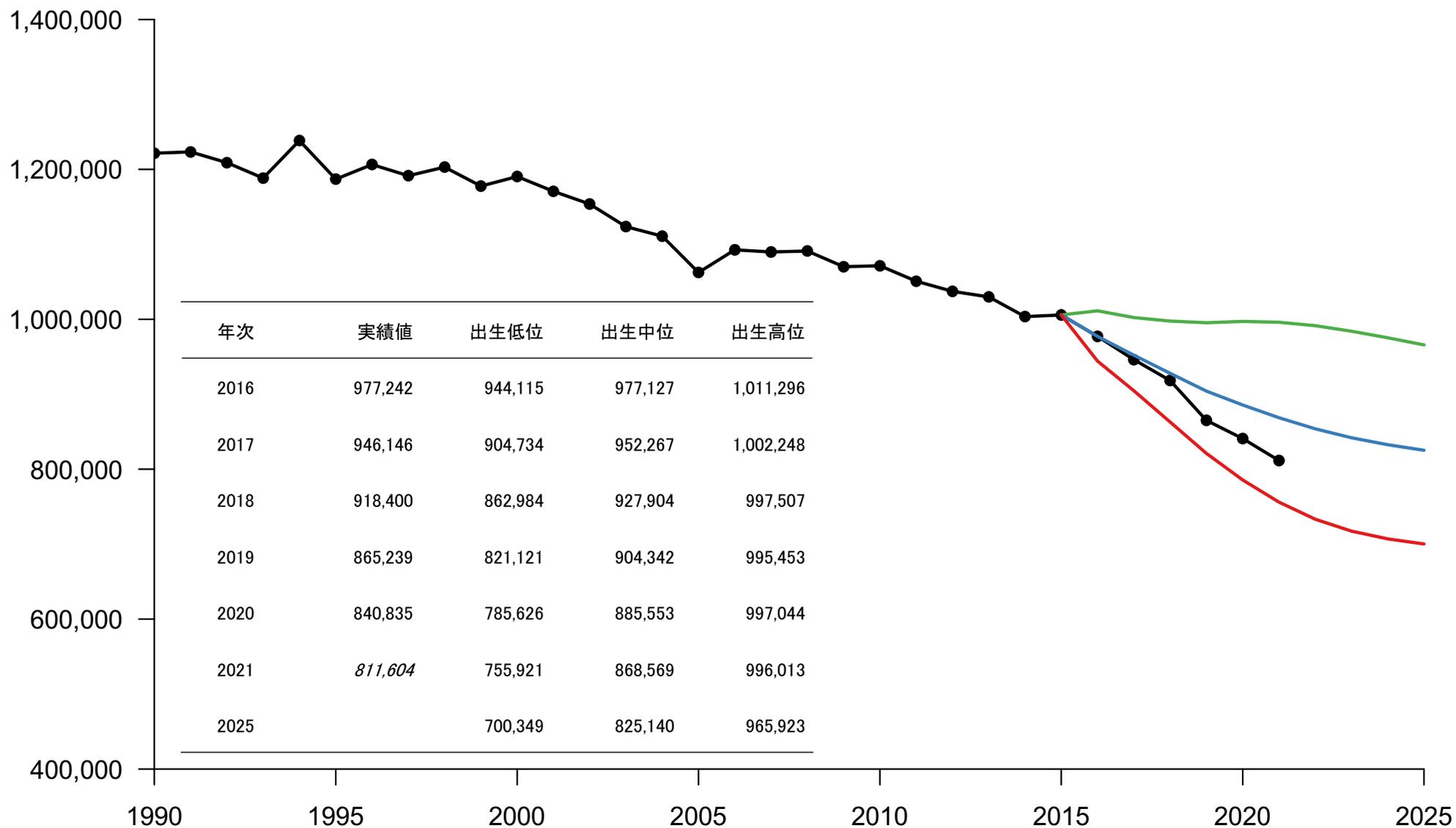
- 死亡低位・出生高位
- 平成29年推計(2015年基準) 死亡中位・出生中位
- 死亡高位・出生低位
- 実績(補間補正人口)
- 実績(国勢調査、総務省人口推計)

# 変動要因の評価

## 出生・死亡・国際人口移動

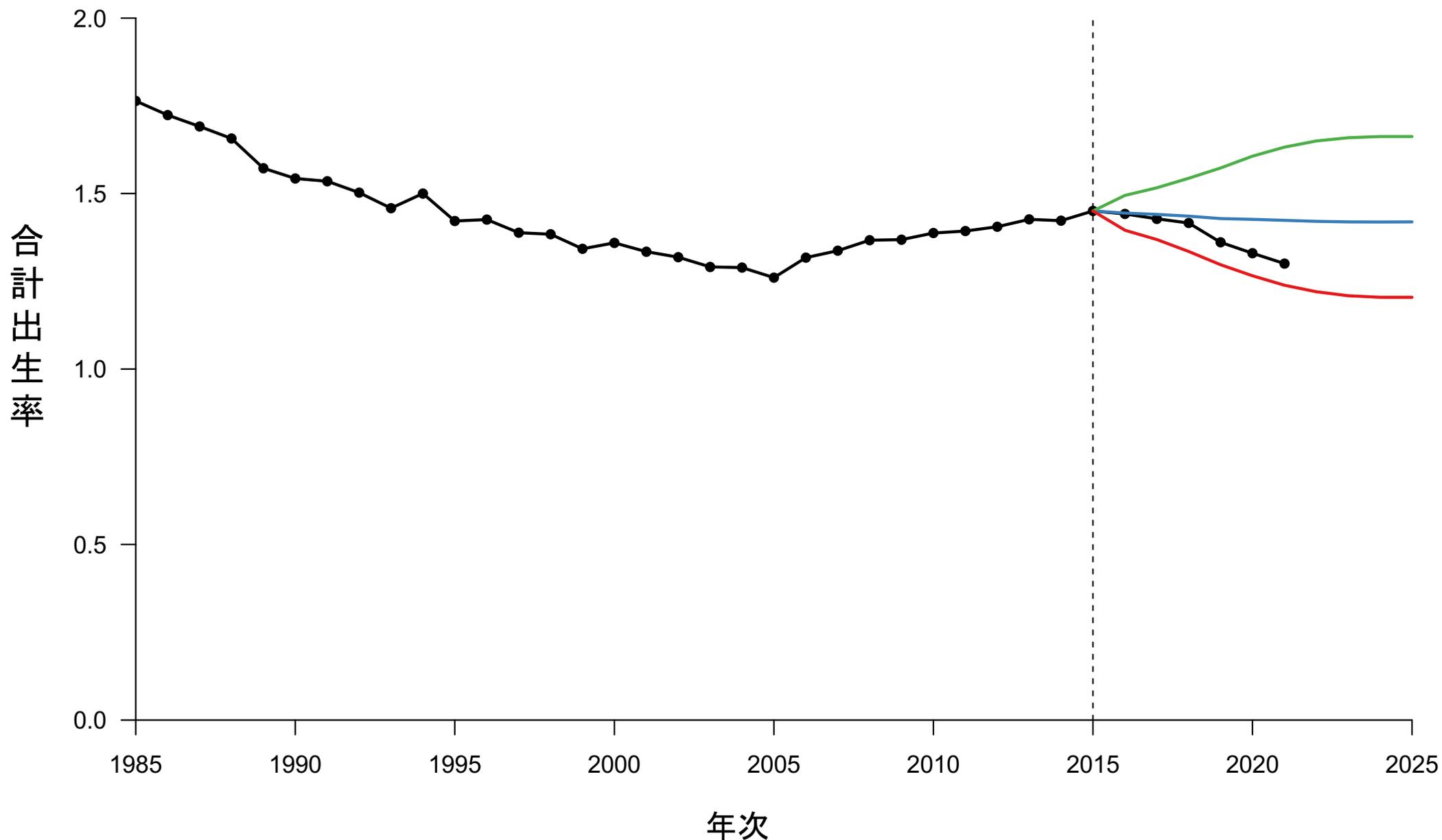
出生

# 年間出生数の比較(実績—平成29年推計)



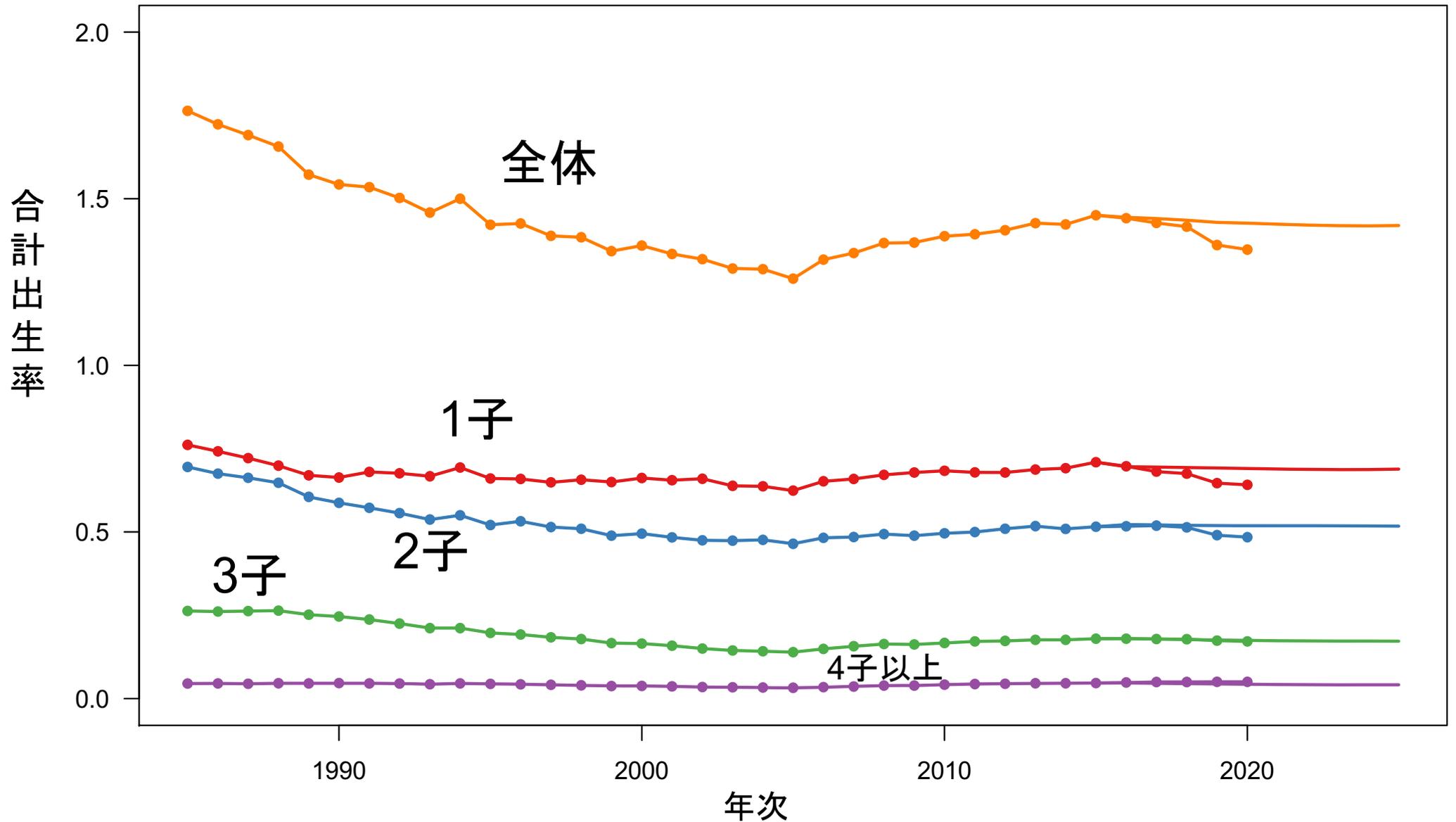
注：日本国籍児。実績値について、2016-2020年は確定数、2021年は概数。

# 期間合計出生率(TFR)の比較(実績—平成29年推計)



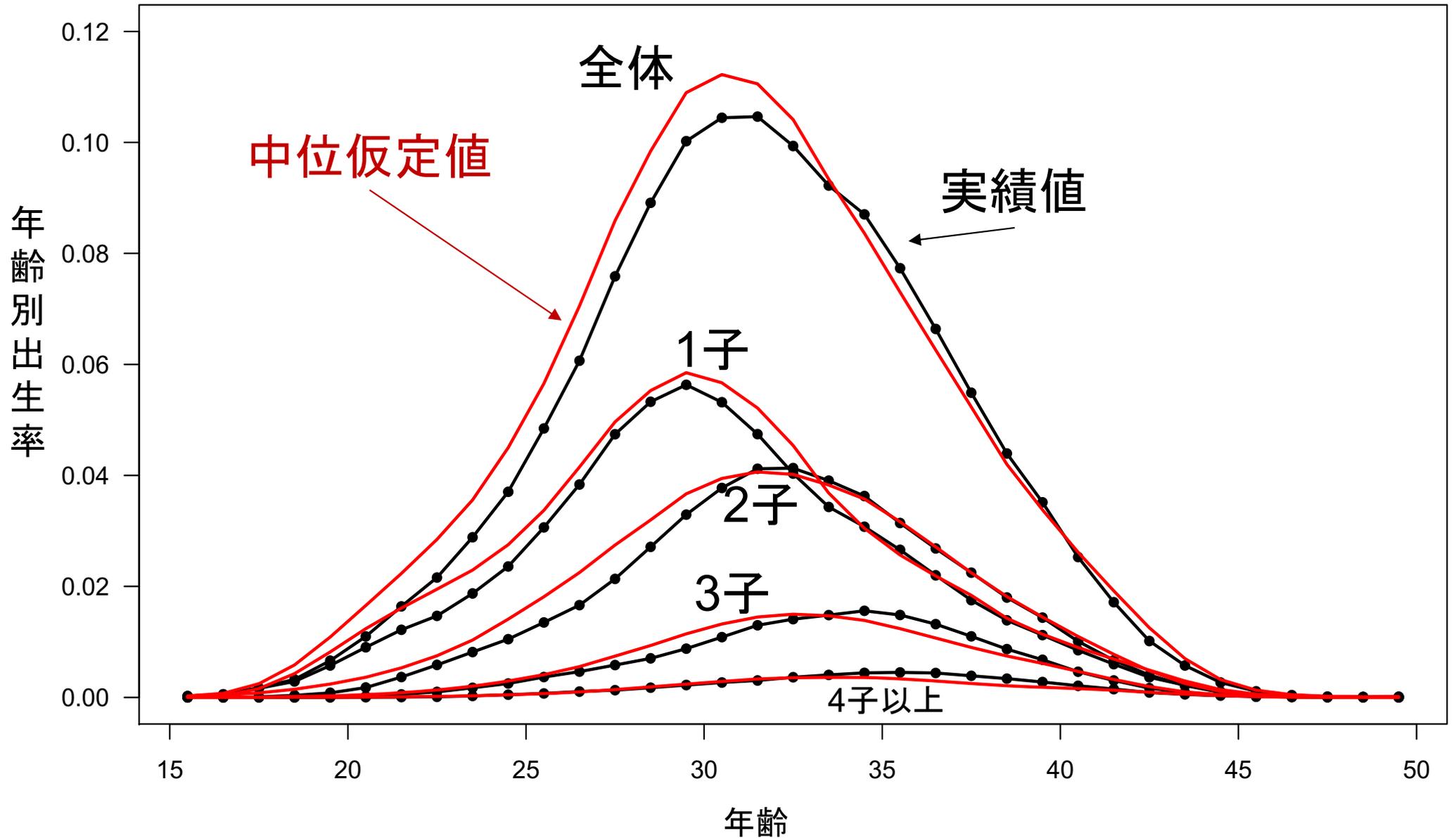
注: 人口動態統計定義の出生率にもとづく。2020年までは確定数、2021年は概数。

# 出生順位別(期間)合計出生率の比較 (実績一平成29年推計)



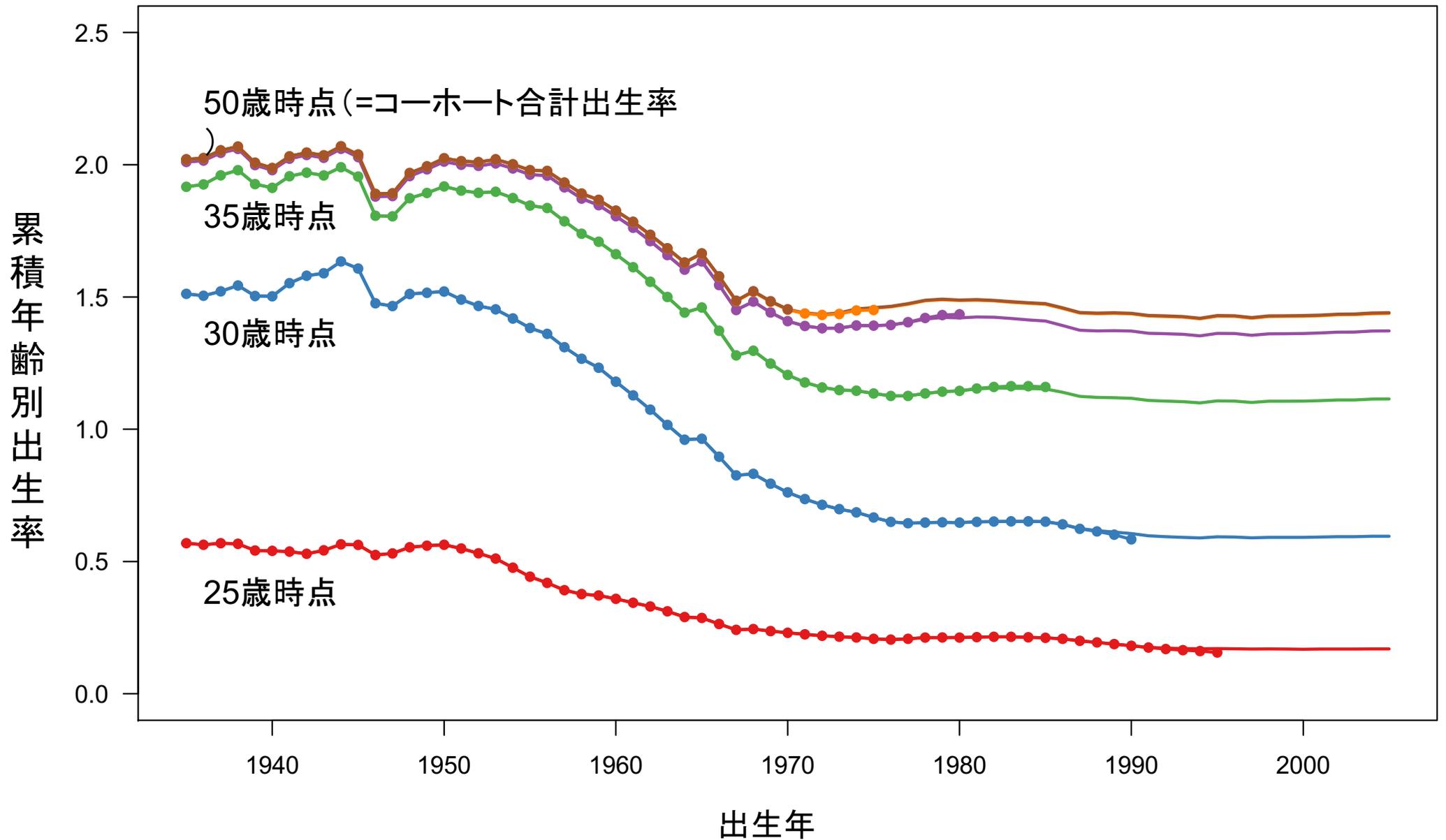
注:人口動態統計定義の出生率にもとづく

# 年齢別出生率の比較 (実績—平成29年推計)(2020年)



注: 人口動態統計定義の出生率にもとづく

# コーホート累積年齢別出生率の比較 (実績—平成29年推計)

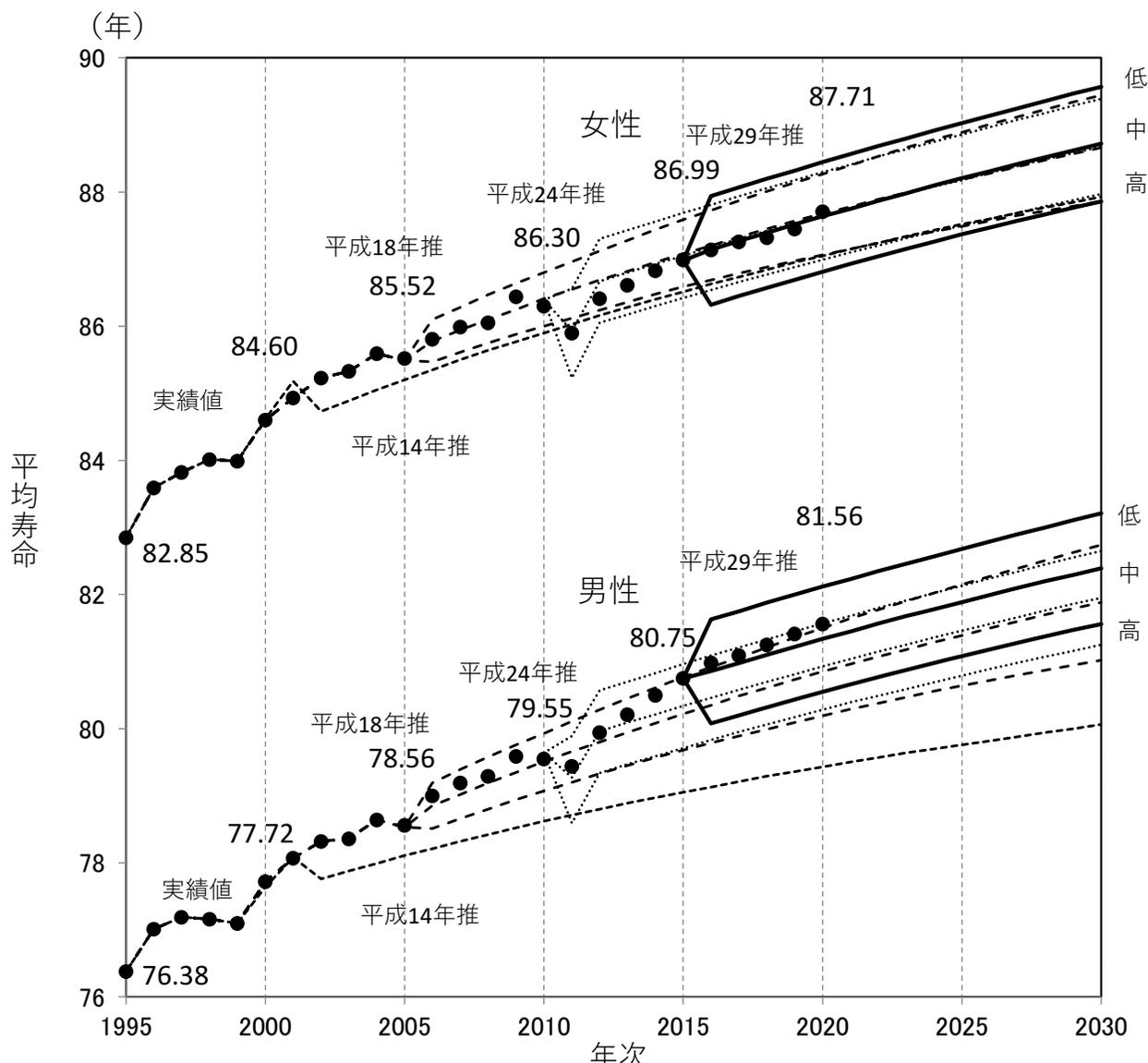


注: 人口動態統計定義の出生率にもとづく

死亡

# 近年の死亡率の動向と将来推計値

平成29年推計で用いられた修正リー・カーター・モデルによる平均寿命の将来推計値と2016年以降の実績値を比較すると、男女とも実績値は高位と低位の幅の中を推移している。2020年における中位推計値／実績値は、男性81.34年／81.56年、女性87.64年／87.71年となっている。

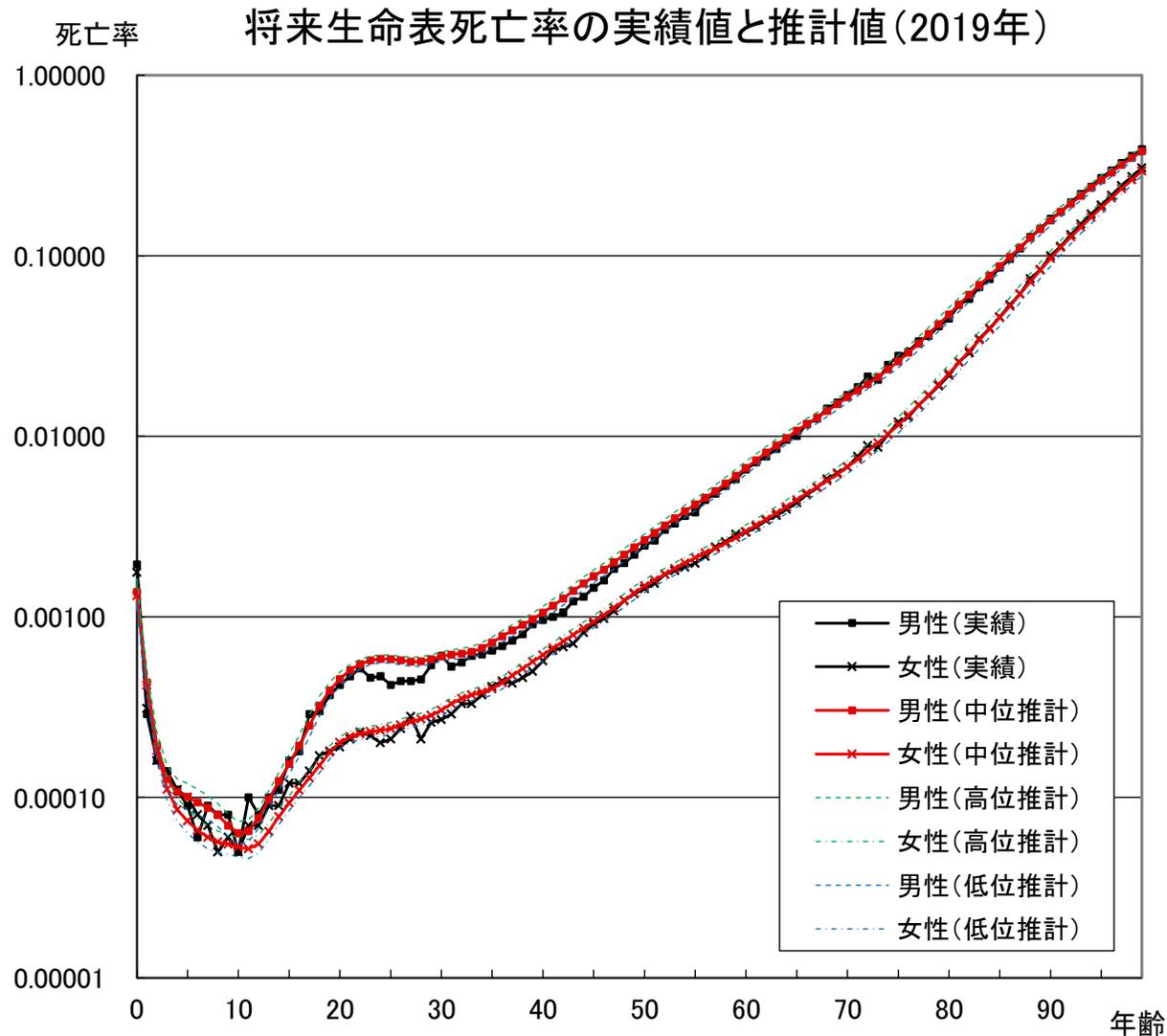


資料：厚生労働省「完全生命表」「簡易生命表」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」（平成14年1月推計、平成18年12月推計、平成24年1月推計、平成29年推計）

# 近年の死亡率の動向と将来推計値

平成29年推計で用いられた修正リー・カーター・モデルによる年齢別死亡率の将来推計値と2019年の実績値を比較すると、概ね推計モデルが当てはまっていた。

詳細に見ると、男性の20～60歳辺りで推計値がやや過大、女性は90歳以上でわずかに過小である傾向が見られる。



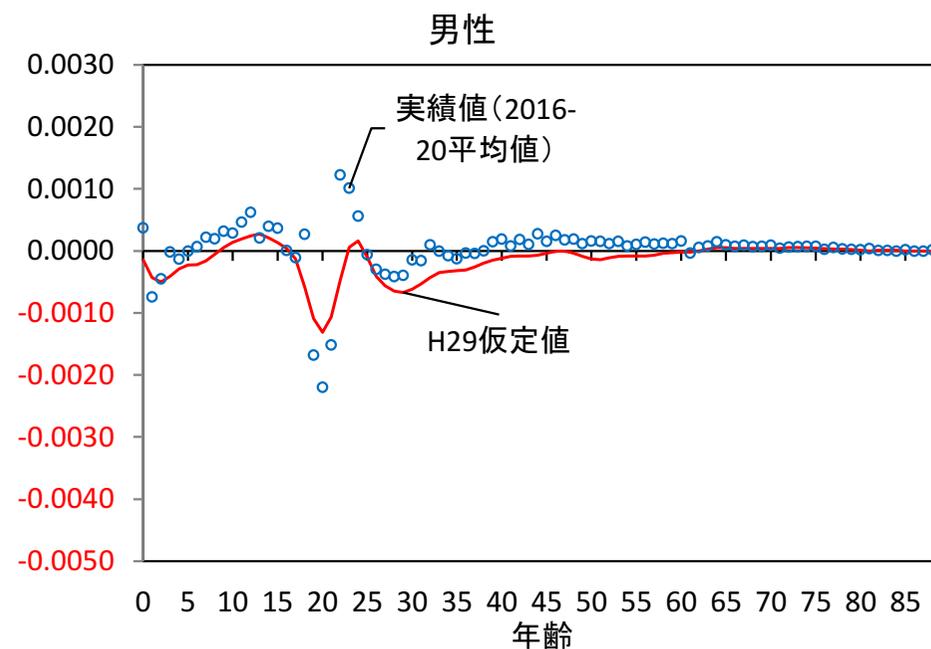
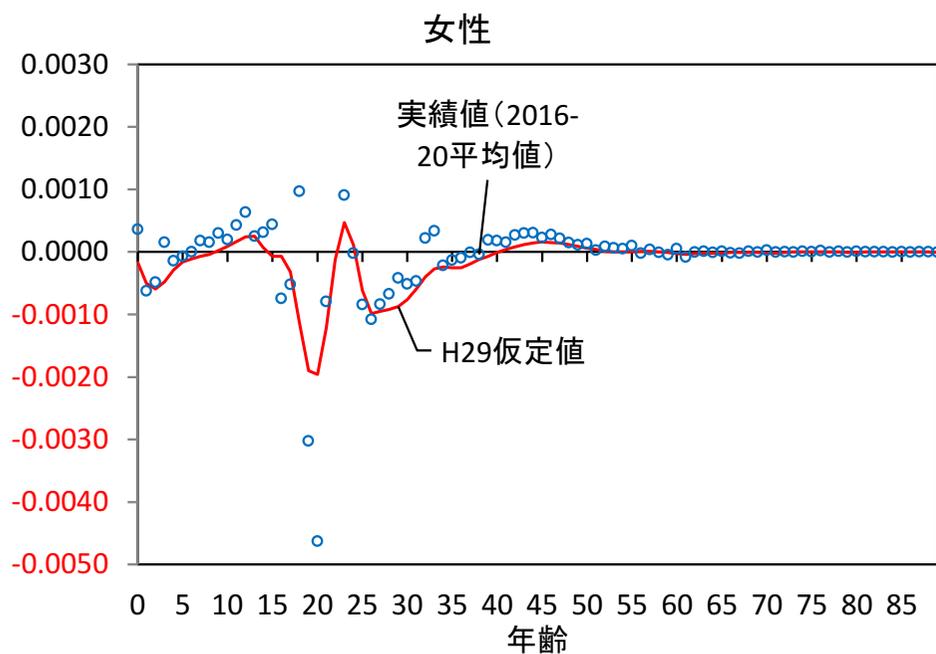
# 国際人口移動

# 国際人口移動の仮定設定：日本人

日本人の国際人口移動については、男女別入国超過率（前年10月から当該年9月）の年齢パターンを仮定値に用いる。

下図では、2016～2020年の実績値の平均をプロットし、平成29年推計における仮定値と重ねているが、概ね仮定値のパターンに沿っている。

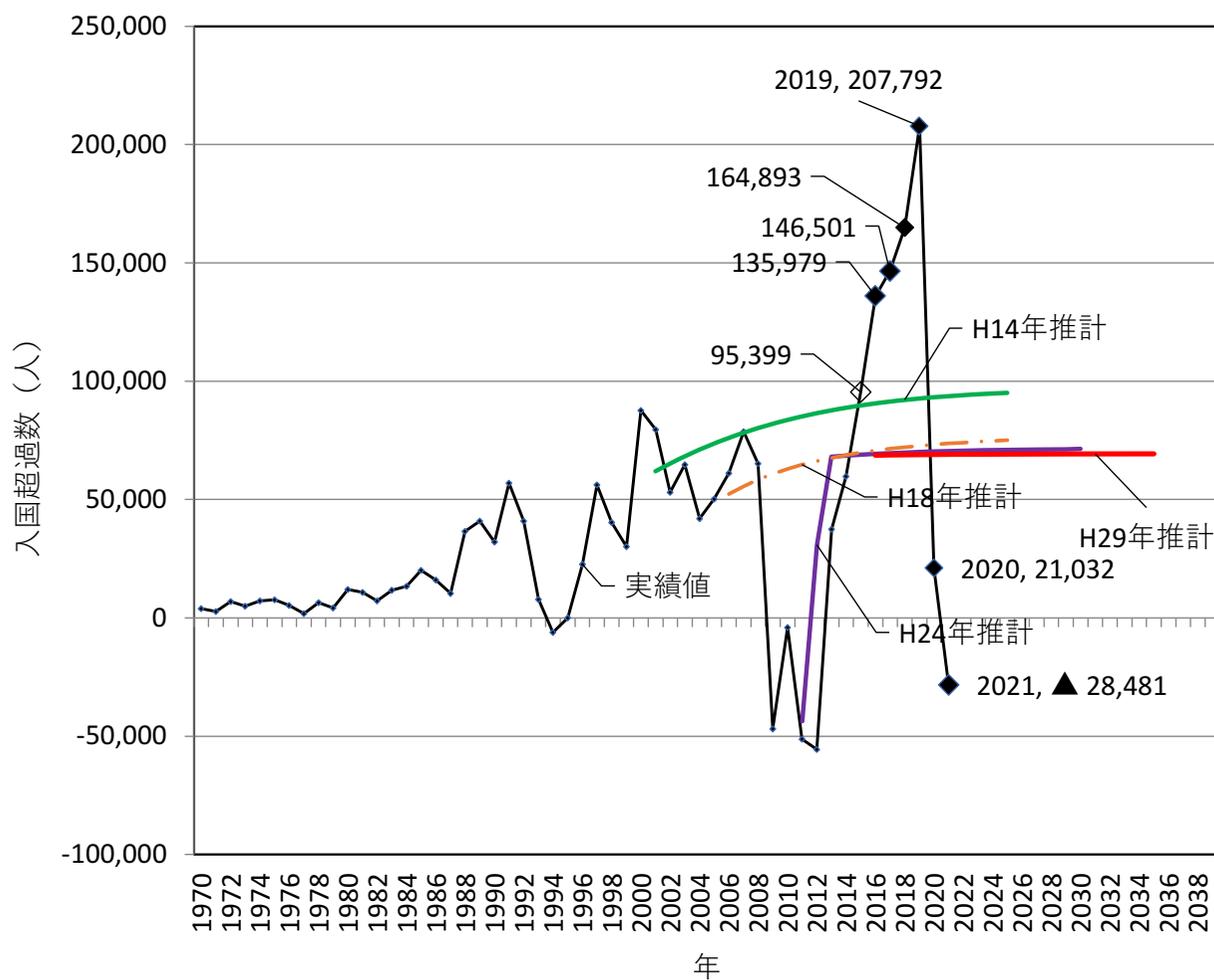
## 日本人の年齢別入国超過率：実績値



# 国際人口移動の仮定の変遷：外国人入国超過数

国際人口移動の仮定は、推計時点における直近実績値を補外することにより設定している。下図は、過去3回の推計における外国人の入国超過数の推移を、実績値の推移とともに示したものである。

## 入国超過数(外国人)の推移



# 中長期仮定設定の見直しのポイント

- 出生
  - 若年層の低出生率を踏まえて出生率仮定水準を見直す
  - 年齢パターンを柔軟に表現できるモデルを開発
- 死亡
  - 2019年までの実績値(特に男性の平均寿命の過小推計)を踏まえて死亡水準の長期動向を見直す
- 国際人口移動
  - 外国人流入規模の新潮流を踏まえ、入国超過の水準を見直す
- 中長期設定とは別に、2020年、2021年のコロナ禍といった非常事態による短期的影響は、別途加味する